

2019年3月24日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「神の国はどこに」

聖書：ルカによる福音書17:11～21

「神の国」とは何か？神の国はどこにあるのか？いつ来るのか？もうすでに来ているのか？神の国とは死んでから行く天国のことなのか？

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは「神の国はあなたがたの間にあるのだ」と言う。岩波訳では「神の国はあなたたちの現実の只中にあるのだ」。また新約学者田川健三の訳では「神の国はあなた方の中にある」と言う。いずれにせよ「神の国」は、こんなにも近くにあるモノなのか？！ もう一つ、「神の国は、見える形では来ない」とあるが、田川訳では「神の国は観察できるような仕方に来るわけではない」とある。これは要するに外からは見えない、観察する形では見えない、私たちの只中で起きること、私たちの中で現されるということになる。

このことを現しているのが、「重い皮膚病を患っている十人の癒し」物語になる。「ある村」とは、重い皮膚病を患っている人々が暮らす隔離村だといわれる。病気が発覚すると家族から、地域から切り離され、隔離村に押し込まれていった。イエスは重い皮膚病を患っている人たちの声を聞いて彼らを見て癒していく。ただ、十人のうちサマリア人の一人だけがイエスのもとに戻って来た。何故一人だけか？ここに差別されていた者が、さらに差別をするという構図が見えてくる。同じ重い皮膚病の時には一緒に屈辱を味わっていた者が、癒された途端に、ユダヤ人のサマリア人差別が起きたのではないか。これは十分に起き得ること。差別の中にさらに差別が生まれることはあるもの。

差別、抑圧の中にありながらも神の側にいることを覚え、神を賛美する時、苦しみ、暗闇の中に置かれながらも、神の側に私たちがいることを知り、神を賛美し、祈る時、イエスの言葉は響く。

「神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」」私たちが只中で神の国は起こされ、私たちの中で現され、サマリア人の中に、神の国の喜びが見せられているということ。その神の国は、他の人たちには見えない、観察できないのは当然であろう。

私たちは、現実の只中でどのような方々と連帯し、共有しようとしているのか。そこに神の国は見えるのか？(神谷)